

松本清張研究会・  
第45回研究発表会

## 松本清張「砂の器」国際シンポジウム

令和5年6月24日(土) 午後2時~6時

松本清張記念館 地階 企画展示室  
対面・オンライン併用(参加者:100名)

### 「文学史の中の清張」

講師

東京学芸大学名誉教授

山田 有策



最初に私の文学史の考え方をお話ししておきたいと思います。一つの作品が生まれるには、必ず前の時代の何かが作用しており、そこには流れがあり法則性がある。作品と作品の間につながり、その様々な線の総合が文学史であるというこ

とです。少し具体的な例を挙げます。清張さんより十年ぐらい年上の方で、海野十三という作家がいます。雑誌『新青年』にSF的探偵小説など沢山の作品を発表しました。その作品に「振動魔」というのがあります。お金持ちで奥さんも美しく、何不自由のない生活を送っている男が主人公です。しか

し、当時は死病の肺結核にかかっている。で、名医の手術を受けます。ある薬品で肺の周りをブロックして結核菌が入るのを阻害する、そんな手術を受けて回復する。そのうち、名医の若い奥さんと不倫の関係になる。奥さんは妊娠し子供を産むという。困り果てた主人公は庭に密室の実験室を作り、奥さんを入れてある音響を響かせる。その振動によって子宮の中の胎児を殺すわけです。女は去り、男は解放される。ところが皮肉なことに、その波動が手術でブロックした彼の肺の壁も壊してしまい、彼も死ななくてはいけなくなる。

「振動魔」という作品は、音波を使うのが新しい。読むと、どこかの何かとひっかかってくる。今日、国際シンポジウムで語られるはずの「砂の器」の中の、第2第3の殺人。超音波による殺人です。時代は超音波の時代なんです。原作では、主人公は新進気鋭の音楽家で、電子音楽のエキスパートです。超音波によるメスで、心臓が弱い若い俳優に心臓麻痺を起こさせ殺してしまふ。頼まれて、友人の文芸評論家の愛人の子供も堕胎させ、結果的にその女の人も殺してしまふ。つまり、海野十三の「振動魔」を支えたアイデアはずっと流れていて、松本清張という才能にぶつかっただけで、超音波による殺人という形で浮上した、あるいは再生したと考えることができる。一つの文学史の細い流れです。

もう一つ例を挙げてみたい。松本清張に「発作」という作品があります。昭和32年の作です。主人公はギャンブル好きで借金に追われている。病気の奥さんに仕送りもせずに愛人と遊び回っている。だらしない、どうしようもない男です。ある日、目覚めた時から不快なことが起きる。会社では大きなミスをしてかして上司から叱責される。借金もできず、愛人からも冷たくされて、ぼろぼろになっていく。

最後に、深夜電車に乗ってつり革につかまって前を見る。すると、一人の男が眠りそう、横に倒れそうになってまた元に戻る。同じことが繰り返される。毎日繰り返す自分の意

情な日常のリズムのように見える。離れられない。眠りそうでもまた元に戻る。そういう律動に魅入られているうちに、発作的に荒々しい感情に突き動かされて、相手の首を絞めるかたちで飛びかかっている。日常生活の中の不条理な怒り、あるいは殺意かもしれない。そこで小説は終わり、結末は読者に任されている。

これは非常に巧妙な作品です。この「発作」を読むと、前の時代のある作品が思い浮かびます。大正文学を代表する作家、志賀直哉の初期の作品「剃刀」です。床屋の若い主人が主人公です。痲痺で神経質ですが、人気質の職人です。その彼が風邪を引く。忙しい季節なのに、手が震えるほどの高熱を出して寝てなくてはならない。でも、元々痲痺な人だから、弟子の若い職人さん達のやることなすこと気に入らず、苛立ちが募っていく。とうとう起きて剃刀研ぎを始めるが、その剃刀は得意先からつき返されてしまふ。誇りがズタズタになる。

そういう時に、男がやってきて「髭をあたってくれ」という。これから女郎屋にでも行くかというような下衆ぶった男です。潔癖な主人公は生理的にこの手の男は大嫌いなんですが、皆が止めるのを押し切って震える手で剃り始める。そのときに、ふっと傷つけてしまふわけです。浮き上がってくる小さな血の塊を見ているうちに、突然荒々しい感情に突き動かされて、剃刀でその男の喉を切ってしまう。血しぶきが飛び散る凄惨なシーンで作品は終わります。

これもまた、日常の中の不条理な怒りとか殺意とかを描いているわけです。大正期の志賀直哉の「剃刀」という作品は、時代をずっと流れてきて、松本清張という作家に結びついて「発作」という作品になって浮かび上がってきた。これも一つの文学史の流れです。

志賀直哉は、実は「濁った頭」とか「范の犯罪」とかの、この手の犯罪小説をいっぱい書いています。では、なぜこ

いう作品を明治末から大正にかけての時代に書かなきゃいけないかったのか。実は、谷崎潤一郎も初期に犯罪小説をたくさん書いていた。佐藤春夫もそうです。広津和郎という作家は「神経病時代」という小説を書いて、時代を神経病の時代と捉えた。大正期は、明治の荒々しい革命と戦争の時代から比べると、かなり落ち着いた小市民的な社会です。しかし鎖まっても明治の荒々しさは恐らく底を流れていく。大正期の若い芸術家たちは皆、その荒々しさを感知していたに違いないなく、それが犯罪小説という形になって浮かび上がってきたと考えられる。

大正期は、文化がかなり拡大していった時代です。映画が出て、谷崎潤一郎はそれに夢中になりました。大衆社会の段階です。文化を誰でも享受できる時代です。特に文学の分野では完璧に口語体が成立します。明治文学の難しい文語体が洗練されて、口語体になっていく。芥川龍之介とか菊池寛の小説を読むと、非常にわかりやすく明快です。特に芥川龍之介は美的完成度が高い。

またこの時代、文学が拡大して、一種のエンターテインメント性、娯楽性も必要とされてくる。明治の終わり頃は自然主義文学の全盛期です。非常に渋くドラマティックじゃないから面白くない。その反動か、大正期は娯楽性を文学の中に取り込んでいく。こういう大衆文化の推進者は、多分、菊池寛です。文藝春秋社を作って、文化を大衆的に広げていこうとした。広がったその一つが探偵小説です。江戸川乱歩が出てきます。

明治という時代は倫理と論理の時代です。それが大正期になると、例えば谷崎潤一郎が出てきて、「刺青」という作品を書きます。刺青など明治の作家は書けません。若い女の肌に刺青を施すことを念願として生きている刺青師の物語です。刺青を入れる瞬間に女性の方が強くなる。初めて人間の「身体」という問題が出てきたのです。これを引きずっていくのが、江戸川乱歩です。変装したり、変身したり、女性に変わったり、人体改造をしたり。あれも「身体」の重要性を言っているわけです。時代が変わるときは、そういう革命的な変わりかたをするわけです。

この大正期と比較して、同じような変革の時代として考えられるのが、昭和30年代です。例えば、新聞雑誌につけ加え

て週刊誌が出てくる。ラジオや映画もこの時に最盛期を迎えました。そして、テレビが出てくる。文化の媒体が限りなく広がっていく。本格的な大衆社会が成立した。同じ文化を誰でも共有できる大衆文化の時代がきたわけです。ほとんど領域で口語体が成立し、誰でも読んで書けるようになっていくのもこの時代です。

その時代をリードしたのが松本清張です。大正期に菊池寛がやった仕事をもっと巨大にしたのが清張さんです。だから、菊池寛から松本清張という流れは明らかに見てとれます。こういう形で文化あるいは文学史はつながっていくのです。また、清張さんが出てくることによって、それまで截然と分かれていた「純文学」と「大衆文学」が重なり合って、エンターテインメントが非常に高度になってくる。クロスして境目がなくなりました。

そして、清張さんのちよつと後に司馬遼太郎が出てくる。二人は、相棒という関係であると同時に、補完的な存在と考えてもいい。司馬さんは全部、時代・歴史小説です。二人はラインではなくワンセットで捉えることができる。清張さんは明治の作家では森鷗外が好きでしたが、司馬さんは圧倒的に漱石派です。明と暗という点でも相互補完的です。清張さんは昭和史の歴史の暗黒面をえぐるのが好きな方。ところが、司馬さんは歴史の明るい面を見ていこうとした。二人で補完し合いながら、昭和30年代から40年代の巨大な文化を作りあげていったのです。

もう一つこの二人が共通してやったことは、歴史と文学を重ね合わせその境目をなくして、新しいジャンルを作り上げていったことです。清張さんの『昭和史発掘』とか『日本の黒い霧』を読むと、小説を読むよりスリリングで面白い。『二・二六事件』なんて特にそうで、あれは歴史を文学にしてみました。司馬さんもそうで、『坂の上の雲』は確かに小説ではあるが、小説らしくない。僕が好きな『街道をゆく』という作品も新しいジャンル。

ところが、清張さんと司馬さんというセットにいち早く気付いたのが、半藤一利さんです。『清張さんと司馬さん』という本で、二人の間には太いつながりがあり、重なり合っていると、私よりも先に言ってしまった。見事な比較作家論であると同時に、文学史論です。半藤さん自身が優れた昭和史

の研究者でした。半藤さん自身が清張さんと司馬さんと、そして私（半藤）というラインで考えていたのではないかと思えます。